

ガイドブックにみる「名所」の変遷 ——1830年代の江戸から2000年の東京まで——

高 槻 幸 枝

1. はじめに

ガイドブック¹⁾には、ある場所について、読者の間に共通の価値観を醸成するとともに、すでに多数に受け入れられている価値をさらに広めるといふ機能があると考えられる。そして、そこで取り上げられている「名所」²⁾は、様々な制約はあるものの、ある程度その時代の雰囲気や反映していると推測できる。地理学において、このようなガイドブックおよびそこに描かれる名所を扱った研究には次のようなものがある。竹内（1965, 1979, 1989）は、ツーリズム産業におけるガイドブックの重要性や、その分析には、ツーリズム商品に対する需要の質を規定するイデオロギーの観点が必要であることなどを指摘し、日本製および外国製の外国人向けガイドブックにおける日本像について論じた。滝波（1995）は、フランスの代表的旅行案内書である『ギド・ブルー』の空間のあり方を、二時期の記述様式の比較、イメージの定量的分析、シチュアショニスト³⁾による都市空間記述との比較などから示し、また、西村（1997）は、『ギド・ブルー』の記述内容や使用されている用語の分析から、その価値体系を検討した。浮田・伏見（1999）は、19世紀初頭から現代までの18点の河内のガイドブックを用い、取り上げられる名所の変化や、その記述内容の相違点などを示した。これらの研究は、ガイドブックが呈示するイメージが客観的・絶対的なものではなく、その時代の社会的・文化的な文脈の中で作られた、相対的なものであるという前提のもとにおこなわれている。このうち、ある程度長い期間において、それらのイメージがどのように移り変わってゆくかということに着目しているのは浮田・伏見（1999）のみである。ただし、これは複数のガイドブックの経年的な分析よりも、『河内名所図会』と他のガイドブックとの比較の方にや

や重点が置かれている。また、ある場所が「名所」として認識されているのは、どのような特質のためなのかということや、その認識のもとになっている価値体系などについては、あまり詳しく述べられていない。

以上のことを踏まえ、本稿では『江戸名所図会』から現在のガイドブックまで、約170年間に出版されたガイドブックのうち、7点を検討対象とし、その間の江戸、東京の「名所」の変遷をたどるとともに、各ガイドブックが「名所」に見出している価値の変化について、考察した。

2. 時期ごとの「名所」

2.1 対象としたガイドブック

本稿では19世紀から現代までの名所の傾向を大まかに捉えることを目的とするため、各時期の代表的なガイドブックを選んだ。またガイドブックは、個々の名所が項目として示されているものと、地域について述べる文章中において名所の説明がなされているもの（または名称のみがあげられているもの）とに分けられる。後者の場合、どのレベルまでを対象とするかなど、やや扱いが難しくなるため、今回は前者の形式を対象とした。さらに、第二次世界大戦前～終戦直後の時期のガイドブックについては、浮田（1993）なども参考に、当時から有名であったと思われるものを選定した。その後のガイドブックについては、入手しやすく現在も読まれている、より一般的だと思われるものを選んだ。表1にそれらの一覧を示す。

発行の間隔はAとBが約40年、BとCが約50年、CとDが約20年、DとEが30年、EとFが15年、FとGが2年となっている。当初は、全体に20～30年で統一することを考えていたのだが、A～Dは資料の制約もあってやや間隔がひらいて⁴⁾いる。またE～Gは、取り上げられる名所がより短いサイクルで変化していることが予想される

表1 対象としたガイドブック

	書名	刊行年	編著者	特徴	構成
A	江戸名所図会	1834・1836	斎藤月岑編・ 長谷川雪旦画	対象地域は現在の神奈川県、埼玉県、千葉県にまで広がり、記述内容も多岐にわたる。文章、画ともに実地調査に基づく。	7巻20冊 掲載項目*： 本文 810件 挿絵 519件**
B	東京名勝図会	1877	岡部啓吾郎 著・大谷南谷 画	『江戸名所図会』と同様の様式により、明治初期の東京（区部のみ）を紹介したもの。	上下2巻 掲載項目： 本文 82件 挿絵 40件**
C	日本案内記	1929～1936 1930（関東編） を使用	鉄道省	概説と案内編（東京市及近郊）に分かれており、地図、挿図、写真も添えられている。	8巻 掲載項目： 253件***
D	旅程と費用	1953 (初版は1952)	日本交通公社	1919年からジャパン・ツーリスト・ビューローが刊行していた『旅程と費用概算』を、戦後『旅程と費用』と改題し復刊したもの。1冊で日本全国を紹介。名所の紹介だけでなく、刊行コースの提案もあり。	掲載項目：137件
E	郷土史料事典―県別シリーズ 刊行と旅13東京	1983 (初版は1970)	人文社	人口、面積、歴史などの開設および名所の紹介。商業施設や娯楽施設や少なく、寺社、史跡、文化施設の掲載が多い。	掲載項目：780件
F	ブルーガイド ニッポン 10 東京	1998	実業之日本社	オールカラーで、地図、写真が豊富。観光スポットの紹介以外に、観光コースの提案もあり、読者情報が募集されている。	掲載項目：79件
G	JTBのポケットガイド 15 東京	2000	JTB	オールカラーで地図、写真が豊富。観光スポットの紹介およびテーマごとのコラム。コースの提案は無く、Fより小型。	掲載項目：300件

* 現在の東京都内にあたるもののみ

** 本文の項目と重複するものを含む

*** C以降では、挿絵の代わりに写真が掲載されているが、ほとんどが本文項目と一致しているので、別個に集計することはしなかった。

ので、戦前期よりも間隔を狭めた。さらに、調査時点での最新の情報を検討に取り入れるため、Fからの発行間隔は非常に短くなるが、Gも対象に加えることとした。

2.2 時期ごとの傾向

2.2.1 対象データ

ガイドブックによる掲載項目の偏りを除き、ある程度一般的と考えられる名所を検討に用いるため、前述のガイドブックのうち、2点以上で取り上げられている名所（369件）を考察の対象とすることとした。

表2 考察の対象とした掲載項目の件数

分類	件数	%
寺社	159	43.1
史跡	35	9.5
自然	30	8.1
施設	119	32.2
その他	26	7.0
合計	369	100

それらを5つのカテゴリーに分類した結果を表2に示す。それぞれの具体的な内容は次のとおりである。

寺社：寺院・神社・祠・堂など

史跡：古墳・城跡・塚・碑・旧跡・旧宅・墓など

自然：池・川・山・桜・梅・ケヤキなど

施設：公園・橋・博物館・劇場・商業施設・交通施設・霊園など

その他：惣名・郷名・駅名・堰・貯水池など

2.2.2 掲載項目の変遷

前出の7点のガイドブックを、①江戸時代、②明治時代～戦前、③戦後～昭和後期、④現代の4時期に分類し、それらに掲載されている名所（2点以上のガイドブックで取り上げられているもののみ）について集計をおこなった。図1は各時期の名所の、種類別の件数および割合を示したもの、図2は各時期において新たに掲載が始まった名所の、種類別の件数および割合を示したものである。

なお、①の時期の名所については、それ以前の

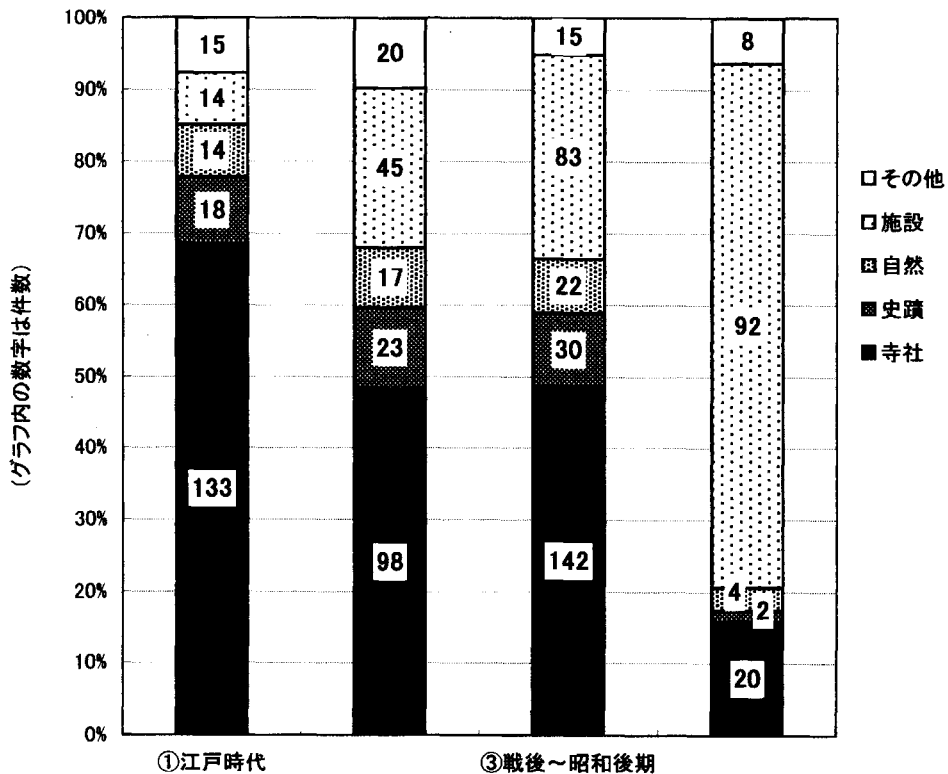


図1 各時期の名所の種類別件数と割合

資料を用いていないため、初出か否かを確認することができない。よって、図2には、①の時期のデータは含めなかった。

①江戸時代(『江戸名所図会』。以下、表1に合わせAとする。他も同様)の傾向

図1の①の時期をみると、Aにおける掲載項目は「寺社」にウェイトが置かれたものであったことが分かる。それ以外の種類の名所の件数には、大きなばらつきは見られない。

「寺社」以外の項目とその内訳は、「史跡」が江戸幕府成立以前の城址・著名人の墓・塚など、「自然」が池・川・山など、「施設」が橋など、「その他」が惣名・駅名などとなっている。

なお、『江戸名所図会』に取り上げられている名所の種類に関しては、金子(1995)、鈴木(2001)らにより検討がなされており、また本項の目的は掲載されている名所の変遷をたどることであるので、江戸時代に関しては大きな特徴のみを示した。

②明治時代～戦前(B・C:明治時代～第二次世界大戦まで)の傾向

(a) 名所全体について

図1の②の時期は、約50%が「寺社」、約20%が「施設」である。図1の①と比較すると「寺社」が2/3近くまで減少し、「施設」が3倍程度に増加している。

(b) 新たに加えられた名所について

図2の②をみると約40%が「施設」であり、次いで「寺社」、さらに「史跡」の割合が高く、これら3種類で全体の80%を占めている。

「施設」の内訳は庭園・公園が16件、博物館・美術館・動物園が7件、その他が9件である。

公園の設置は明治6年(1873)の太政官布告によって法制化され(丸山; 1993)、この際に寛永寺(上野)、浅草寺(浅草)、飛鳥山(飛鳥山)、深川八幡(深川)、増上寺(芝)という江戸時代以来の名所が、公園として指定を受けた(カッコ内は公園の名称)。これらの公園についてはB(1877発行)にも記載があるが、項目名として取り上げられているわけではなく、寺院の項目の説

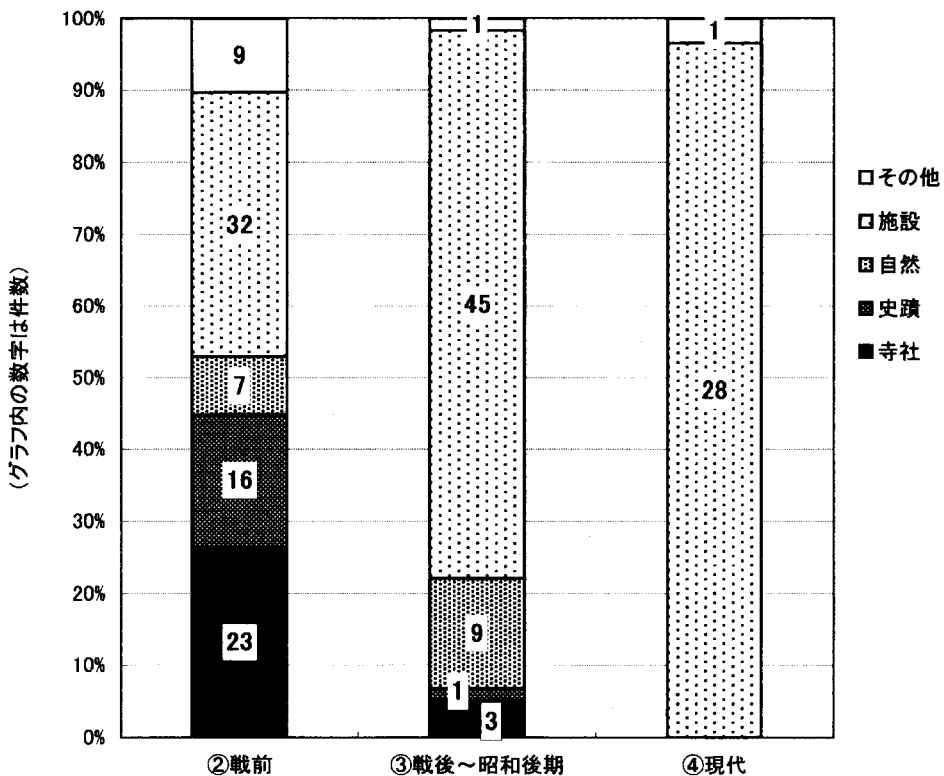


図2 各時期に新たに加えられた名所の種類別件数と割合

明文中で公園指定について触れるという書き方がされている。紙幅の都合もあったのかもしれないが、独立した項目として紹介する必要はないと判断されたということであろう。これに対してC(1930発行)では、公園と寺院が独立した項目になっているもの(2件)、公園名のみが項目になり、その中に寺社についての説明があるもの(1件)、旧来の名所の名称のみが項目になっているもの(1件)と、項目の立て方に変化がみられる。また、これらの公園が設置された後に開園した公園(日比谷、墨田、錦糸)なども掲載されている。これらから、公園数が増え、施設としての整備も進み中で、単なる江戸時代からの名所の延長ではない新しい名所としての「公園」が、BとCの間の時期に成立し、人々に受け入れられていたことが想像される。

博物館は、公園と同様に明治期に新しく導入され、人々を集めるようになった施設である。日本における近代的博物館は、明治5年(1872)に湯島聖堂で文部省博物局によって開かれた博覧会が、会期終了後も日にちを決めて公開を続けるようになったことに始まる。さらに明治6年(1873)には、内務省による博覧会が内山下町(現在の千代田区内幸町)で開催され、会期終了後も公開されるようになった。その後、文部省博物館は現在の東京国立博物館へ、内務省博物館は現在の東京国立博物館へと、継承されてゆくことになる(椎名; 1993)。B(1887発行)の執筆時には両者とも存在していたと思われるが博物館の掲載はない。C(1930発行)には、上記2館のうち、内務省博物館を母体とする東京帝室博物館のみが掲載されており、さらに、鉄道博物館(1921開館)・演劇博物館(1928開館)などの専門博物館や、聖徳記念絵画館(1926開館)といった、美術系の施設もみられるようになる。

その他の施設として、Bには国立銀行(1873完成)、Cには東京駅(1914完成)、議院(1927完成)、東京株式取引所(1879創立)など首都東京の繁栄・活況を示すような施設が紹介されている。国立銀行や東京駅などは同時に、大規模な洋風建築物としても人々の興味をひいていたと考えられ、Cには建物の様式・構成や使用材などについての説明もみられる。この種の建築物としては他に、Cに掲載されているニコライ会堂(1892完成)がある。

「寺社」は、「施設」の次に初出件数が多いが、全23件のうち、明治期以降に創建されたものは4件である。なお、その他の寺社はそれ以前の創建と考えられるが、『江戸名所図会』には掲載がない。

「史跡」の全16件(全てCにのみ掲載されている)のうち、7件を著名人の墓が占める。その他には、城跡、碑などがみられるが、中でもこの時期の特徴と考えられるのは、古墳や貝塚などの古代の遺跡(古墳2件、貝塚1件)である。

「自然」の全7件(全てCにのみ掲載されている)のうち5件が、都心から離れた西東京地域(奥多摩町、青梅市、五日市町、府中市)にある。その内訳は花の名所・温泉・石灰洞となっている。2件の温泉のうち網代鉱泉は、江戸時代の開湯と言われているが、『江戸名所図会』には掲載がない。高岡(1993)によれば1930年代は、鉄道省によるハイキング・キャンペーン(1934)などに後押しされ、郊外レクリエーションが盛り上がりを見せる時期であったという。C(1930発行)はその直前に鉄道省によって発行されたものであるが、「旅行日程案」と題して、登山や温泉めぐりの推奨ルートなども示されている。鉄道が整備され、郊外への小旅行が容易になったことでハイカーが増加し、新たな行楽地が紹介されるようになり、さらにハイカーが増加する……、というような世相の一端が、Cの掲載項目には反映されているのかもしれない。

③戦後～昭和後期(D・E:第二次世界大戦～80年代まで)の傾向

(a) 名所全体について

図1の③では「寺社」が約50%を占めている。ただしこれはEが、歴史的な場所や文化財の掲載に力を入れており、結果として寺社が多く掲載されているためであろう。「施設」は図1の②よりさらに増加し、約30%となっている。

(b) 新たに加えられた名所について

図2の③では「施設」の件数が突出して多い。これに、次に多い「自然」を加えると全体の約90%になる。

「施設」の中では、最も多いのが博物館・美術館、次が公園・庭園である。D(1953発行)とE(1983発行)に分けてみると、Dでは公園・庭園が最も多く、次いで博物館・美術館、Fでは、

その反対になっている。博物館・美術館は、戦後ある程度の期間をおいてから設立されているものが多く、ちょうどDとFの間に増加しているため、このような結果になっているものとおもわれる。また、Dに後楽園球場（1937開場）、Fに神宮球場（1926開場）、国立競技場（1924開場、1958改修）などのスポーツ施設がみられる。これらはすべて、戦前から既に存在していたものである。しかし本稿で対象としたAからGのガイドブックに関しては、初めて掲出されたのは戦後になってからであった。他に目に付くのは、東京国際空港（1931開港、1952国際空港となる）や東京港（1925日之出棧橋建設に始まり、1941国際貿易港となる）などの交通施設、サンシャインシティ（1978完成）のような複合的な商業施設の掲載である。

「自然」の内訳は、山、渓谷、温泉、鍾乳洞などで、すべての項目がD、F両方に掲載されている。また、これらはみな西東京地域（八王子市、奥多摩町、秋川市、青梅町、五日市町）の景勝地である。

④現代（F・G：90年代以降）の傾向

(a) 名所全体について

図1の①の約70%が施設であり、自然（4%）と史跡（2%）が図1の③よりも減少している。ただし、施設に分類したものの中には、日本橋のように施設であると同時に、現在では史跡の要素を持つものも含まれている。

(b) 新たに加えられた名所について

図2の④のほとんどが「施設」である。これらには博物館・美術館に加え、遊園地や演芸場などの娯楽施設や、恵比寿ガーデンプレイス（1994オープン）のようなオフィス・飲食店・映画館・デパート・ホール・美術館など様々な施設が1ヶ所に集まっている複合的な施設が目立つ。

また、葛西臨海公園（1989開園）、レインボーブリッジ（1994完成）などのような、臨海副都心の開発（1986東京都第二次長期計画に始まる）にともない建設された施設が、この時期の特徴的な掲載項目となっている。

3. 記述内容からみた「名所」

3.1 記述形式の比較

具体的な記述内容の変遷について検討する前に、まず各ガイドブックの記述様式の違いをみておくことにする。そのため、ガイドブックAからGまでの全てに取り上げられていた、「金龍山浅草寺」、「万松山泉岳寺」、「湯島天満宮」、「聖堂」の4件について、記述様式・内容を整理した（表3）。

字数に着目してみると、AとEは概して他のものより多い。また、FとGは、どの名所についても、文字数が大体揃えられている。

挿絵あるいは写真の枚数は、挿絵がその特徴の一つであるAが、他よりも多く、1つの名所に対し、複数ページの挿絵が添えられることも多い。これに対し、B以降は、1つの名所に対する挿絵・写真はだいたい1枚であり、また、1ページ全てを挿絵に使うのではなく、小さ目のカットを1ページの中に、文章とともにレイアウトするようなかたちになっていく。なお、Eは白黒写真、F・Gはカラー写真である。A、Bでは、本文では立項されていないものが挿絵になっていることや、名所の説明、俳句・和歌などの書き入れがされていることがある（このため、挿絵単独で名所を紹介することが可能になる）が、C以降、本文から独立した挿絵（写真）や、挿絵への俳句・和歌や文章の書き入れもなくなる。ただし、D・F・Gの写真には、「赤穂四十七士が眠る泉岳寺」のように、情報が添えられている。

縁起は、AとEでは、どの名所に関しても説明がある。しかし、その他のガイドブックは、必ずしも縁起について触れられてはいない。特に、F・Gでは全く言及されていないか、かなり省略されている。行事についても同様で、A・Eでは必ず紹介されているが、その他では触れられていないことも多い。

表3には加えられなかったが、名所までの道順の記述も、ガイドブックにより異なっている。A・Bでは、おおよその位置は示されているものの、「円満寺の北の方にあり」、「湯島六丁目にあり」などのように、名所によって表現が異なり、説明も大雑把である。Cでは最寄駅の名称・町名などが示されるようになり、Dでは最寄駅からの距離が加えられる。さらにE～Gでは距離に代わり、所要時間が示されている。

道順と同様の実用的な情報として、D・Eには観覧時間・休日についての記述があり、F・Gには、さらに電話番号が記載されるようになっている。

表3 記述内容の比較

名称	時期	ガイドブック	掲載名称	字数	挿絵(写真)の枚数	縁起・歴史の記述	行事の記述
浅草寺	①	A	金龍山浅草寺	◎	24	○	○
	②	B	金龍山浅草寺	△	1	○	×
		C	浅草寺	◎	1(公園地図)	△	×
	③	D	浅草寺	○	—	○	○
		E	浅草寺	◎	5(写真)	○	○
	④	F	浅草寺	△	1(写真)	△*1	△*2
		G	浅草寺	△	2(写真)	△*3	×
泉岳寺	①	A	万松山泉岳寺	◎	4	○	○
	②	B	泉岳寺	△	—	×	×
		C	泉岳寺(赤穂義士墓)	△	—	×	○
	③	D	泉岳寺	△	—	○	○
		E	泉岳寺	○	1(写真)	○	○
	④	F	泉岳寺	△	1(写真)	×	×
		G	泉岳寺	△	—	×	×
湯島天満宮	①	A	湯島天満宮	△	2	○	○
	②	B	湯島神社	▲	—	○	×
		C	湯島天神	△	—	△*4	×
	③	D	湯島神社	△	—	△*5	○
		E	湯島神社	○	1(写真)	○	○
	④	F	湯島天神	△	1(写真)	×	○
		G	湯島天満宮	△	—	×	×
聖堂	①	A	聖堂	○	2	○	○
	②	B	師範学校(旧聖堂)	△	1	○	○
		C	湯島聖堂址	△	—	×	×
	③	D	湯島聖堂	△	—	○	×
		E	湯島聖堂	○	1(写真)	○	○
	④	F	湯島聖堂	△	1(写真)	△*6	×
		G	湯島聖堂	△	—	△*7	×

字数の区分は、◎：1000字以上、○：500字以上1000字以下、△：100字以上500字以下、▲100字以下
枚数は、1ページを1枚として数えた

*1：都内最古であることのみ記述、*2：日にちの記載はなし、*3：都内最古であることに加え、創建年も記載、*4：創建時期のみ記載、*5：湯島へ移転してきた年を創建年としている、*6：湯島へ移転する前についての記述なし

3.2. 記述内容の変遷

第2章の2.2では名所を5種類に分けたが、同一のカテゴリーに分類される名所であっても、注目されている点は異なっているという場合がある。

さらには、同一の名所であっても、ガイドブックにより、強調される面が違っていることもある。これらは、名所としての「価値」をその場所のどこに見出すかという、ガイドブック作成者側の視点の違いによるものであろう。

このような異なるガイドブック間にみられる価値観の相違を比較しやすくするため、また、AからGまでの間の名所に対する価値観の変化を明確に示すため、次のような「価値」を設定することとした⁹⁾。これらは、各ガイドブックの文章が、読者にアピールしている特質を、仮に6種類に分類したものである。

- 【i】視覚的価値 (景色, 建築物, 美術品など, 目を楽しませるものがある)
- 【ii】教養的価値 (知的好奇心を満足させる歴史や展示品などがある)
- 【iii】娯楽的価値 (娯楽を提供する)
- 【iv】保健的価値 (心身をリフレッシュさせる, 運動になる)
- 【v】個性的価値 (新しい, 珍しいなど, 他にはない特徴を持っている)
- 【vi】宗教的価値 (信仰心を抱かせる, ご利益を期待させる)

以下ではこのような「価値」の視点から、いくつかの名所の記述内容を見てゆくこととする。

3.2.1 湯島天神

以下では、ガイドブックごとにその記述内容とそこから読み取ることができる「価値」について整理した。なお、「」は本文の引用であり、【】は上で分類した5つの「価値」を示したものである。

A (「湯島天満宮」) では本文中に、神社の縁起 (「太田道灌江戸の静勝軒にありし頃、夢中に菅神に謁見す」「祠堂を営み、かの神影を安置し、且梅樹百株を植ゑ、美田等を附す」) 【ii・vi】、眺望が開けていること (「古松はるかにめぐり、注連のうちに武蔵野の遠望を懸けたるに」) 【i】、梅の木があること (「野梅盛りに薫ず」) 【i】、菅原道真ゆかりの神社であること (「夢中に菅神に謁見す」「北野の御神と聞えければ」) 【ii・vi】、例祭のこと (「例祭は毎歳九月十日に行ふ」) 【iii・vi】 が書かれている。また挿絵の書き入れには、植木市のこと (「月毎の廿五日にハ植木市ありて殊更にぎはしく一時の壮観なり」) 【iii】、料理茶屋のこと (「表門の通り左右に料理茶屋あり」) 【iii】 が紹介されている。挿絵には芝居小屋、楊弓場なども描かれ、境内から見下ろせたとと思われる、谷下の景色も描かれている。

次に、B (「湯島神社 (郷社)」) では、簡略化

された神社の縁起 (「太田道灌江戸の静勝軒にありし頃、夢中に感ずることありて創立すといふ」) 【ii・vi】、境内が高台にあって、眺望が優れていること (「高丘にありて景光勝れ」) 【i】、梅の木があること (社前数株の榎花を植ゑ) 【i】、茶店 (「風流の茶肆も多し」) 【iii】 について述べられている。挿絵は無い。

C (「湯島天神」) は、詳しい縁起には触れられずに、創建時期のみが述べられている (「江戸開府以前に創建された神社」) 【ii】。梅の木が多いこと (「境内梅樹多く」) 【i】 と、眺めがよいこと (「眺望に富む」) 【i】 は、A、Bと同様である。さらに「奇縁氷人石」(Aの発行後、1862に建立) についての記述がみられる (「拝殿の前面右側に奇縁氷人石あり、文久年間に建てたもので、高さ約一米半、迷子知らせ石標の一である」) 【ii】。

D (「湯島神社」) では、菅原道真を祀っていること (「祭神天手力雄神・菅原道真」) 【ii・vi】、例祭のこと (「例祭五月二十四、五日」) 【iii・vi】、創建時期 (「江戸開府以前からの古社で」) 【ii】、梅の木があること (「境内には梅樹が多く」) 【i】、眺望がよいこと (「急崖をなし眺望に富み」) 【i】、「奇縁氷人石」のこと (「拝殿前に迷子知らせの『奇縁氷人石』があり」) 【ii】、Cの発行後1942に建立された筆塚のこと (「泉鏡花の筆塚」) 【ii】 が紹介されている。挿絵は無い。

E (「湯島神社」) では、「婦系図」のこと (「泉鏡花の“婦系図”の舞台として」) 【ii】、Aとはやや異なった縁起 (「文和4年 (1355) に湯島の郷民が、霊夢によって菅原道真を祀り、梅数百株を植えた」) 【ii・vi】、梅の木のこと (「境内は古くから“湯島の白梅”として知られる梅の名所で、いまも約400本の紅梅・白梅があり」) 【i・ii】、梅祭りのこと (「毎年2月25日～3月15日は、“梅まつり”として、露店などもでてにぎわう」) 【iii・vi】、中世から江戸時代にかけての様子 (「中世はわびしい小社」「江戸時代に入って、境内で“富くじ”が売られるようになって (略) 料理茶屋・楊弓場・芝居小屋などが建ちならぶ、行楽地」) 【ii】、「学問の神様」として賑わっていること (「試験合格を願う受験生や父兄の参詣が多く」) 【iv】、鳥居のこと (「銅造りの明神鳥居は、都指定の文化財」) 【ii・v】、祭神【ii・vi】、梅祭り・例祭の日程【iii・vi】 が述べられている。また、注として、奇縁氷人石についての詳しい説

明【ii】がある。

写真には社殿や境内の風景ではなく、絵馬の奉納風景が使われており、「学問の神様」としての光景が示されている。

F（「湯島天神」）では「学問の神様」として賑わっていること（「多くの受験生が祈願に訪れて」「絵馬の数には圧倒される」）【iv】、祭神について（「菅原道真を祀る」）【ii】、梅のこと（「梅の木も多く」）【i】、梅祭りの日程【iii・iv】が述べられている。写真には、「入学試験のころ、学生で賑わう湯島神社」というコメントが添えられている。

G（「湯島天満宮」）では、「学問の神様」菅原道真を祀っていること【ii・vi】、「婦系図」および「湯島の白梅」のこと（「泉鏡花の小説『婦系図』の舞台」「湯島の白梅」と呼ばれる梅が咲き誇る）【ii】、鳥居のこと（「青銅製の鳥居は都の重要文化財」）【ii・v】が、述べられている。写真は無し。

全体を通して、共通しているのは i）視覚的価値と ii）教養的価値、vi）宗教的価値の存在である。具体的には「梅」と「菅原道真」は、全てのガイドブックがとりあげている。

「梅」と同じく、i）視覚的価値に分類される要素でも、「眺望」についてはE以降、触れられなくなる。これは、展望フロアを備えた超高層ビルの出現や、現在見ることができる風景の特徴の無さなどから、「眺望」を楽しむ場所としての注目度が減少した結果ではないかと思われる。

ii）教養的価値のうち、神社の「縁起」や「歴史」は、Aでは詳細に紹介されているが、その後はEを除いて簡略になり、F・Gでは「菅原道真」の名前がみられるのみである。その代わり、C以降では、新たに「奇縁氷人石」や「泉鏡花の筆塚」について記述されるようになる（Fを除く）。特に泉鏡花に関しては、最新のGにも取上げられており、『婦系図』の舞台とされたことで、湯島天満宮には新しい価値が加わったと言えるだろう。vi）宗教的価値については、A・B・Eでは創建にあたって「太田道灌が菅原道真の夢を見た」という神秘的なエピソードが語られるが、その他には、そういった宗教的なありがたみを演出するような記述はない。代わってE以降では、「学問の神様」という性格が強調され始める。ただし天神と学問を結びつけるという考え方自体は、新しい

ものではない。小松（2001）は、北野天満宮は、10世紀後半には貴族により学問の神として信仰され、近世の寺子屋の普及とともに子どもと結び付けられたと述べている。「受験地獄」という言葉が使われ出したのは1960年代だと言われているが、そのような世相を反映して、E以降、「学問の神様」としての面が強調され出したのではないだろうか。「学問の神様」については、FでもGでも真っ先に紹介されており、現在では湯島天満宮の、名所としての主要な価値となっていると考えられる。

3.2.2. 日本橋

日本橋については、A、B、D、Gに記載がある。

A（「日本橋」）には、橋と周辺の町の歴史（「この橋を日本橋といふは、旭日東海を出づるを、親しく見る故にしか号くるといへり」「北の橋詰を室町一丁目となづく」）【ii】、江戸の中心・街道の起点であり、繁華な場所であること（「この地は江戸の中央にして、諸方への行程もこの所より定めしむ」「橋上の往来は、貴となく賤となく、絡駅嗽々として囂し」）【v】が示されている。

B（「日本橋（附 人力車濫觴[はじまり]・電信局・魚河岸）」）では、街道の起点であること（「九陌中繁鬧第一等の地にありて、八十余州里程を計る源なり」）【ii・v】、車馬・船で賑わっていること（「車馬の絡駅[つづく]たる舟舶の輻輳[あつまり]する、みな人の知るところなり」）【v】橋の歴史【ii】、改造後の橋の詳細（「明治6年五月改造落成す」「その結構たるや（略）壮麗[りっぱ]を極る」「経営費用は市民の積み金をもつて支給」）【i・ii・v】、橋周辺の繁昌の様子（「橋南の北側は一面に掲榜場にて、官事は謂ふに及ばず、神社の祭祀・寺院の開帳などを掲げ示して余地なし」「毎朝魚市を催し、往昔より繁昌を極めたり」）【v】、人力車の起源について（「都下にて人力車を用ゐるも、この地より始まる」）【ii・v】、電信局のこと（「橋南の左側に電信局あり」）【ii・v】が述べられている。挿絵あり。

Dには、橋の歴史（「慶長八年（1603年）の創架で翌年この橋を起点として諸国街道の里程を定め、明治六年（1873年）に東京は日本橋、京都は三条大橋の中央を以て、国内諸街道起点の元標となすと定められた」）【ii】が紹介され、道路元標が残っていること【ii】についても述べられ

ているが、A・Bにみられたような、繁昌の描写はない(写真無し)。

G(「日本橋」)では、日本橋が、かつては日本の中心地であったこと(「かつての日本の中心地」「江戸時代に五街道の起点となって以来交通・文化の中心となった」)**【ii】**、近年周囲が整備されて名所として見直されてきていること(「近年周囲を整備して再びクローズアップされた」)**【v】**が述べられている。写真にも「日本橋は改めて名所の一つとして見なおされている」**【v】**というコメントが添えられている。

A・Bからは、歴史ある橋だという**【ii】**教養的価値、街道の起点であり、人馬も船も非常に多く、他に類を見ないほど賑わっている江戸の中心地であるという**【v】**個性的価値が読み取れる。また、Bでは、改造後の橋を「壮麗」と表現しており、**【i】**視覚的価値が認識されていたことも想像できる。

これに対し、Dでは、橋の位置と歴史**【ii】**・**【v】**が淡々と述べられ、賑わいについての記述はなくなる。そしてE・Fには掲載が無く、Gで再び取上げられている。Gの記述内容は、価値の分類から言えば、**【ii】**、**【v】**にあたると思われるが、A・Bでの取上げられ方とは異なり、「過去に江戸の中心であった場所」である史跡として扱われているようである。

江戸の中心地であり、繁昌を極めていることで名所とされた場所が、中心地としての位置を他の場所に譲り、一時ガイドブックからも消えるが、その後、周囲が整備され、史跡というポジションで名所として再認識されるようになるという一連の変化には、名所の価値が社会的文脈の中で移り変わってゆく様子がよく表現されていると考えられる。

3.2.3 その他

他に名所としての価値に変化がみられるものに、「東京駅」、「日本銀行」などの明治～大正時代の洋風建築物がある。これらは、当初は先進的な大建築であり、東京の繁栄を示すものとして認識されていたと思われる。しかし現在は、例えば東京駅について、Gに、「ルネッサンス様式赤レンガの建物内部には、高い天井、細長い窓の大正モダン息づく」(「東京ステーションホテル」の案内文から)とあるように、繁栄の象徴ではなく、レト

ロな雰囲気が強調されるようになっている⁶⁾。

また、「羽田空港」は、Eでは、歴史、滑走路の本数、乗り入れている航空会社数などに、文章のほとんどが割かれている。最後に「中央フィンガーからジャンボ機の発着がよく見える」とあるものの、景色を楽しむ場所としての認識は薄かったようである。しかしこの後、空港は改築され「ビッグバード」となり、Fでは「日が暮れる頃の展望デッキからの眺めは格別だ」と、夜景の美しさが紹介されるようになる。またGには「バラエティーに富んだ店が並ぶショッピング&グルメゾーンのガレリアになっている」という記述が加わり、夜景の他に、買い物、食事も楽しめる場所として扱いが変化していることが分かる。

4. まとめ

本稿では、19世紀から現在までの7点のガイドブックに記載されている名所を寺社(寺院・神社・祠・堂など)、史跡(古墳・城跡・塚・碑・旧跡・旧宅・墓など)、自然(池・川・山・桜・梅・ケヤキなど)、施設(公園・橋・博物館・劇場・商業施設・交通施設・霊園など)、その他(惣名・郷名・駅名・堰・貯水池など)の5つのカテゴリーに分類し、その件数の増減から、取り上げられる名所の時期ごとの傾向を示し、その変遷を考察した。またガイドブックが、その記述内容から名所に見出していると考えられる価値として、**【i】**視覚的価値、**【ii】**教養的価値、**【iii】**娯楽的価値、**【iv】**保健的価値、**【v】**個性的価値、**【vi】**宗教的価値の6種類を想定し、ガイドブックの記述内容をこれらによって分類し、比較することで、名所に付与された価値感の変遷を考察した。

その結果、江戸期から現在までのガイドブックの掲載項目の主流は、江戸時代には寺社であったが、戦前・戦後には公園・博物館などが増加し、さらに現在では、商業施設や娯楽施設などになっていること、自然の名所は絶対量の減少にも関わらず、全体の割合について言えば、江戸時代以降、昭和後期までほぼ一定の割合を占めていること⁷⁾などが分かった。また、十分な検討はできなかったが、1873年の太政官布告によって設置された公園が、設置から数年後に発行されたガイドブックに掲載されていたり、鉄道省によるハイキング

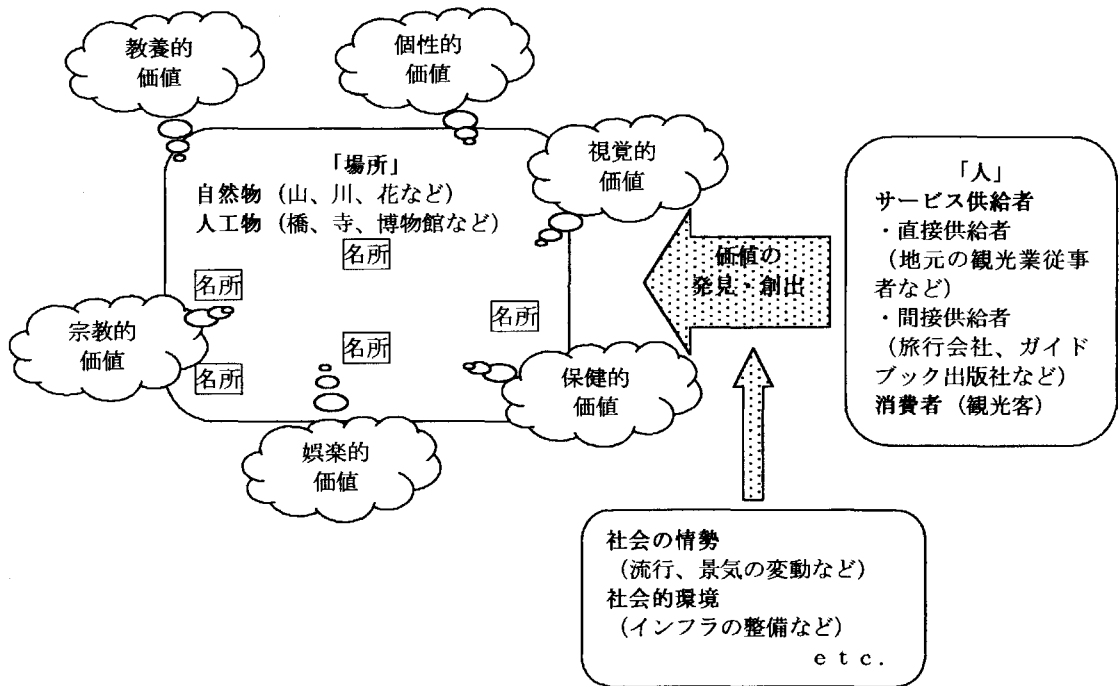


図3 名所の成り立ち

キャンペーン開始（1934）の直前に発行されたガイドブックに、郊外の「自然」名所が紹介されているなど、新たに掲載された名所には（あるいは、途中で掲載されなくなった名所にも）、社会の動きが反映されていることが推測された。

さらに、同一の場所であっても、そこに見出される価値は、必ずしもガイドブック間で一致せず、以前の価値が失われたり、新たな価値が付加されたりする場合があることを、湯島天神や日本橋についての記述内容を検討することで、示すことができた。ガイドブックにより提示される名所像が、ある時期の社会的・文化的文脈における、相対的なものだという事は、すでに指摘されていることであるが、複数のガイドブックを経年的にみてゆくことで、一定期間内におけるその変化の様子を、ある程度具体的に把握することができた。

しかしその一方、資料調査上の理由で、明治中期から大正のガイドブックについての検討ができなかったことや、ガイドブックの個性と時期的な影響を分別するのに十分な数のガイドブックを扱うことができなかったこと、ガイドブック間の参照・引用の関係がどうなっていたかなど、今後の

課題とすべき点も残っている。

なお、以上でおこなった考察から、試みとして「名所の成立背景」を模式的に表すと図3のようになる。ある場所（自然物／人工物）に対し観光サービスの供給者（直接／間接）や消費者が、その時の社会的な影響の下で、それぞれの立場から「訪れるべき」価値を見出す。さらに、それをガイドブックなどが広く紹介することで、その場所が名所として認知されるようになる。本稿では検討することができなかったが、ガイドブック作成者により紹介されてきた価値には、観光客に対し直接にサービスを供給する、地元の意識も関係していると考えられる。例えば、村おこしや町おこしのために、意図的に「訪れるべき場所」を整備したようなケースは、地元主導による価値の創出と言えるだろう。また、最近では、ガイドブック作成者が読者（観光客）の情報を募り、それをガイドブックにフィードバックするようなことも多くおこなわれている。さらに地元の観光協会などがインターネット上にホームページを開設し、観光客および潜在的観光客に対して直接に情報を提供したり、観光客が自らのホームページに個人の

旅行記を掲載するなど、観光情報の供給方法も様々になっている。発行時期や発行元が異なるガイドブックをより詳しく比較するためには、ガイドブック作成者とは異なる視点や、情報の供給源の多様化による影響の考察などを併せておこなうことも必要になると思われる。

謝辞

本稿の作成にあたっては、群馬大学教育学部の関戸明子助教授に大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 本稿では「ガイドブック」を、「見るべき場所」「訪れるべき場所」を選定・解説している書籍とした。
- 2) 1)の「ガイドブック」で取り上げられている場所を、その種類に関わらず「名所」と呼ぶ。
- 3) 1950年代から1960年代に、パリなどのヨーロッパの都市を中心に広がった、政治的、芸術的、思想的運動の実践者達（滝波：1995）。
- 4) 本稿の調査に限れば、明治末期および大正期発行のガイドブックに適當なものがなく、BとCの発行間隔がひらいた。
- 5) 6種類の「価値」を設定するにあたっては、ギド・ブルーを対象に、街区のイメージと評価の関係を検討した滝波（1995）、「みどころ」への価値付けがどのようになされているかを検討した西村（1997）などを参考とした。
- 6) 現在の東京駅は、昭和20年の空襲で壁体のみを残して焼失、昭和29年再建されたものである（原型とは大分異なる）。C、Eには「東京駅」として掲載されているが、Gには、駅自体の紹介はなく、駅舎に付属している「東京ステーションホテル」、「東京ステーションギャラリー」が紹介されている。
- 7) CやD・Eにみられるような郊外の景勝地は、現代の一般的な「東京」のガイドブックには収録されていない。しかしこれは、郊外の景勝地が、名所として認識されなくなったためではなく、「山歩き」などある目的に特化したガイドブックの出現による影響であると思われる。

参考文献

千葉正樹、『江戸名所図会の世界—近世巨大都市の自画像—』、吉川弘文館、2001、326p.

金子晃之、近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』から見た行動分化—、歴史地理学176、1995、pp.20-42.

小松和彦、『神になった人びと』、淡交社、2001、pp.75-86.

西村孝彦、観光空間の生産について—ギド・ブルーの検討を中心に—、『文明と景観』、地人書房、1997、pp.221-271.

椎名仙卓、『図解博物館史』、雄山閣、1993、195p.

鈴木章生、『江戸の名所と都市文化』、吉川弘文館、2001、274p.

高岡裕之、観光・厚生・旅行—ファシズム期のツーリズム—、赤澤史朗・北河賢三編著『文化とファシズム—戦前日本における文化の光芒—』、日本経済評論社、1993、pp.9-52.

竹内啓一、『とぼろうぐ—地理学雑記帖』、古今書院、1993、pp.204-240.

滝波章弘、ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述—雰囲気とモニュメントの対比—、地理学評論68A-3、1995、pp.145-167.

浮田典良・伏見能成、新旧ガイドブックを通じて見た河内の「名所」、歴史地理学41-2、1993、pp.23-34.

たかつき ゆきえ

お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 地理環境学コース